

解説「E.FORUM スタンダード 家庭科(第1次案)」について

北原琢也(元京都橘大学・特別任用教授)

はじめに

まず、家庭科の包括的な「本質的な問い」及び小・中・高等学校の「本質的な問い」を仮説的に提案したい。次に、それぞれの学校段階の「内容」で学習した知識と技能を実生活に活用する学習活動及び、身近な生活から社会に繋がる課題を自主的に見付け、それらの課題を消費や環境などの視点から解決する思考・判断・表現を伴う学習活動、その両者が統合的に習熟・発達した実演や作品を児童・生徒に求める課題内容として、「本質的な問い」「永続的理解」「課題例」の第1次案を提案するものである。

1. 包括的な「本質的な問い」及び小・中・高等学校の「本質的な問い」

家庭科の包括的な「本質的な問い」を設定するため、現行小・中・高等学校学習指導要領家庭科の「目標」及び、その設定に関する5つの要素¹と推測される「家庭と地域社会」「家政学の科学的認識」「生涯学習」「家庭科教育の歴史・諸外国の家庭科教育」「児童・生徒の発達」等に着目した。

そこで、家庭科の包括的な「本質的な問い」として、「どうすれば、生涯を通じてより望ましい生活を創造することができるのか」を仮説的に提案した。

次に、小・中・高等学校の「本質的な問い」の設定は、学校段階別の「目標」及び学校段階別に家庭科担当の教師へのアンケート結果²に着目した。

そこで、各学校段階別の「本質的な問い」として、小学校は「どうすれば家族と健やかに生活することができるのか」、中学校は「どうすれば生活を自立的に営むことができるのか」、

高等学校は「どうすればよりよい生活を創造することができるのか」を仮説的に提案した。

2. 小学校家庭科

現行小学校学習指導要領家庭科の「内容」は、中学校家庭科の「内容」との系統性や連続性を踏まえ、生涯にわたる家庭生活の基礎となる能力と実践的な態度を育成する観点から、中学校の内容構成と同じ枠組みとして構成されている³。また、「内容」の示し方の特色として「言語を豊かにし、知識及び技能を活用して生活の課題を解決する能力をはぐくむ視点の重視」⁴を掲げられている。

そこで、小学校段階では、家族の存在や家族における自分の存在を認識し、生活に関する自然科学的認識から生活するための技能を理解し、生活重視の価値観を育む基礎の育成を見通した、「本質的な問い」「永続的理解」「課題例」の第1次案を提案した。

3. 中学校家庭科

現行中学校学習指導要領家庭科の「内容」は、小学校家庭科の「内容」との体系化を図り、中学生としての自己の生活の自立を図る視点から、「A 家族・家庭と子どもの成長」「B 食生活と自立」「C 衣生活・住生活と自立」「D 身近な消費生活と環境」の4つの内容で構成された⁵。そして、学習した知識と技術などを活用し、これからの生活を展望する能力と実践的な態度を育むことの必要性から、「生活の課題と実践」に関する指導事項を設定し、家族・家庭や衣食住の学習に関心をもち、生活の課題を主体的にとらえ、実践を通してその解決を目指すことにより、生活を工夫し創造する能力や実践的な態度

を育てることをねらいとされた⁶。

そこで、中学校段階では、小学校で学習してきた内容を基盤に自立できる衣・食・住に関する生活技術及び社会的に実践する基礎・基本を身に付け、社会的に自立した生活者として、生活における問題解決の実践的能力の育成を見通すことをめざした。

4. 高等学校家庭科

現行高等学校学習指導要領家庭科（共通教科）の3科目「家庭基礎」「家庭総合」「生活デザイン」から、「家庭基礎」について仮説的に提案した。この科目は、「人の一生と家族・家庭及び福祉」「生活の自立及び消費と環境」「ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動」の3つの大項目で構成され、衣・食・住生活といった家庭内の家事労働や生活問題だけでなく、家族・家庭の理解をスタートとし、とりわけ青年期の課題である自己理解をすることで、自分の短期・中期・長期の生涯設計を図り、自己の資質・能力・態度を育成していくことである。

特に、「ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動」の単位では、「高齢者介護」について仮説的に提案した。同解説家庭科編では3科目ともに、「指導に当たっては、学校家庭クラブ活動等との関連を図り、地域の実態に応じて、実際に地域の高齢者を訪問したり、学校に招いたり、福祉施設等を訪問したりするなどして、高齢者との触れ合いや交流などの実践的・体験的な学習活動を取り入れるようにする⁷」と述べている。

今後、家庭科と高齢者介護との結びつけた学習は避けて通ることのできない内容であると考えるので、この課題にアプローチして、問題解決的な学習に十分反映がなされることを期待して、「本質的な問い」「永続的理解」「課題例」の第1次案を提案した。

おわりに

今までも家庭科教育の中で実践的な態度の育成を目指して、知識・技能を生活の場面で活用することが重視されてきたが、今回、改めてクローズアップされたと捉えることが大切である。活用する能力の観点として設定された「思考・判断・表現」の形成は、「調査する能力」「実験・観察する能力」「文章で書く能力」「発表する能力」などについての評価である。しかし、今までによく使用されてきた多肢選択式テストなどの客観テストでは、評価すべきものを本当に評価できているのかという疑問がある。

そこで、中教審の「報告」（2010年3月24日）は、パフォーマンス評価を推奨⁸したのである。だが、パフォーマンス評価を実施すれば、今回注目されている活用する能力である「思考・判断・表現」が形成されると短絡的に結びつけるのは早計である。あくまでも、パフォーマンス評価のねらいとする諸能力などを、児童・生徒に身に付けるための授業の営みを見直し、練り直すことを第一義にすべきである。

<参考文献>

・池田喜美恵・仙波圭子・青木幸子・田部井恵美子著『家庭科教育』学文社、2012年。

<注>

¹ 池田喜美恵・仙波圭子・青木幸子・田部井恵美子著『家庭科教育』学文社、2012年、33-34頁。

² 同上、35-38頁。

³ 文部科学省『小学校学習指導要領家庭科編』2008年、76-78頁。

⁴ 文部科学省『小学校学習指導要領解説家庭科編』2008年、16頁。

⁵ 文部科学省『中学校学習指導要領技術・家庭』2008年、100-102頁。

⁶ 文部科学省『中学校学習指導要領解説技術・家庭編』2008年、40頁。

⁷ 文部科学省『高等学校学習指導要領解説家庭編』2009年、12頁、23頁、36頁。

⁸ 中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会 「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」（平成22年3月24日）、36頁。